中國新聞　2007年（平成19年）12月14日（金曜日）

雁木を「まちの顔」に

岡山大大学院教授が講演

全国の半分以上 広島県内に存在

土木学会の選奨土木遺産に本年度選ばれた広島市の「京橋川雁木群」について、岡山大大学院の馬場俊介教授（土木遺産論）が広島市であった「土木の日」の催しで講演し、「都市中心部にこれだけ多数の雁木が残っている街は全国でも広島市だけ」と、まちづくりへの活用を訴えた。

雁木は、潮の満ち干にかかわらず船を発着できる階段状の構造物。木や石でできている。選定されたのは、中区の新こうへい橋（白島北町）付近から下流の柳橋（銀山町）までの、京橋川右岸の一群約三十カ所。川から上陸する際の「勝手口」として裏木戸を付けたものや、階段が折れ曲がる複雑な意匠のもの、上り口に天井石があるものなど形と大きさはさまざまだ。

馬場教授によると、国内の雁木は、岡山市の旭川沿いのように規模は大きいが単一でしか残っていないケースがほとんど。それに比べ京橋川雁木群は、幅二㍍前後を中心とした生活用の雁木が二十㍍ほどの間隔で連続して残る。「市民に川が身近だった証拠。これほど残っているとは調査前は信じられなかった」と希少性を指摘した。

広島市内で確認されている雁木は、太田川放水路や他の新設も含め、六つの川に四百カ所以上ある。このほか広島県内には、「国内最長」という御手洗（呉市・大崎下島）の北堀雁木（長さ約二百㍍）や、鞆の浦（福山市）にも残っている。「国内の雁木の半分以上が広島県にある。『まちの顔』として活用しない手はない」と力を込めた。

今回の選定に当たっては、特定非営利活動法人（NPO法人）「雁木組」（氏原睦子理事長）が、雁木の間を行き来する水上タクシーを二〇〇四年から運航し、定着させている点も評価された。雁木組は、築造年代の調査や清掃イベントにも取り組み、雁木再発見の立役者にもなった。土木学会は功績に対し、催しの席上、感謝状を贈った。

氏原理事長は「水上タクシーに乗るたびに雁木の使い勝手の良さに感銘する。先人の知恵とセンス、保存に携わった地域の思いを大事にし、今後も使いながら残していきたい」と思いを語った。

選奨土木遺産への選定などを受け、京橋川などを管理する広島県土木部も「雁木は貴重な遺産だ。今後の護岸工事では極力保存し景観形成に活用したい」と話している。

（守田靖）

選奨土木遺産に選ばれた「京橋川雁木群」の雁木の一つ。上り口の天井に石が渡してある　（広島市中区橋本町）